

# 記録の起源と複式簿記の記録

土 方 久

1. はじめに
2. 「記録」の起源
  - 1) アルタミラの壁画と記録 (以上, 本号)
  - 2) メソポタミア時代の粘土板と記録
    - (1) 粘土球の会計文書
    - (2) 粘土塊の会計文書
    - (3) 粘土板の会計文書
3. 複式簿記の「記録」
4. むすび

## 1. はじめに

「記録の起源と複式簿記の記録」、このような課題に取り組むことは、まさに趣味の域との誇りは免れないが、筆者には、それなりの理由があつてのことである。「会計情報」自体が多様な変革を迫られる現状にあつて、しかも、この変革を可能にする開示「技術」が急速に進歩する現状にもあつて、「それでも、複式簿記に関わるのはなぜか」、したがつて、「それでも、複式簿記の会計、『複式簿記会計』であるのはなぜか」、このような疑問を抱き続けるのは、筆者だけではあるまい。しかし、「ドイツ簿記の16世紀から複式簿記会計への進化」<sup>1)</sup>を解明しただけの筆者には、この疑問に軽率に解答しうるのははずもない。

1) 参照、拙著；『複式簿記会計の歴史と論理』、森山書店 2008年、375頁以降。

もちろん、「人名勘定」から「物財勘定」、さらに、「名目勘定」を開設するようにして、完全な反対記録、完全な「二重記録」を完備する複式簿記<sup>2)</sup>とは異質の構造に変容して、「複式」簿記に関わるのかもしれない。筆者がドイツ簿記の16世紀から取組んできた「複式簿記」とは変質しているのかもしれない。しかし、その変質している「複式」簿記について、万人が納得しうるだけの構造は、簿記教育の現場にも会計教育の現場にも、いまだ開発されてはいないようで、筆者は寡聞にして、これを知らない。

それだけに、浅学の筆者としては、複式簿記の歴史に培われてきた「複式簿記の神話」に無意識に頼りながら、「それでも、複式簿記に関わるのでは」、したがって、「それでも、複式簿記の会計、『複式簿記会計』であるのでは」、と想像してしまうのである。

筆者が、かつて、近代会計の父であるSchmalenbach, Eugenの大著『動的貸借対照表論』に取組むことによって、会計理論と会計制度の関わりを解明していた頃、会計制度、会計理論と「複式簿記」の関わりまで解明する契機の1つとなった言葉を想起してもらいたい。「複式簿記に関する教科書を読むときに、どこか片隅で、糸繰り車がカラカラと鳴るのを聞くような気持ちに決まってしまう。思いがけず何かある事業の複式簿記を覗き見るにしても、このいろんな製品が一つのギルド組織で何か呪文をかけて呼び出しうるような能力があるように思われる。この問題に長く携わっている人は誰も、囚人が地下牢の石壁に慣れてしまうように、これに慣れてしまう。複式簿記は、着替えようとする経営者のいろんな宿命によって無理矢理に着用していることのような強靱なものである。複式簿記は古い上着のようなものである。なるほど、着用する人が大きくなって体に合わなくなったかもしれないが、それは長持ちしたのだから、その生地を心底から褒めてやらねばならない。したがって、これから、複式簿記の欠陥について、いくらか述べるにあたっては、『裁断』を考えるのであって、『生地』を考えるのではない<sup>3)</sup>という、筆者には忘れられない言葉である。

2) 参照、拙著；『複式簿記の歴史と論理』、森山書店2005年、331頁以降。

3) Schmalenbach, Eugen; *Buchführung und Kalkulation im Fabrikgeschäft*, Leipzig 1928, S.1.  
二重括弧は筆者。

複式簿記の精髓を見事に描写する、これほどすばらしい比喩があるだろうか。なるほど、「複式簿記は古い上着のようなものである」のも、「着替えようとする経営者のいろんな宿命によって無理矢理に着用していること分かるような強靱なものである」からである。そうであるからこそ、「着用する人が大きくなって体に合わなくなったかもしれないが、それは長持ちしたのだから、その生地を心底から褒めてやらねばならない」のである。しかし、「強靱なものである」との思いこそは、「これに慣れてしまう」ことで、「複式簿記の神話」になっているのではなかろうか。

もちろん、「複式簿記の神話」を否定しようなどというのでは決してない。生地を選び直そうなどというのでは決してない。そうではなく、どのような生地であったか、長持ちしたのはなぜか、ここから裁断を考えねばならないのでは、ということである。「会計情報」自体が多様な変革を迫られる現状にあって、しかも、この変革を可能にする開示「技術」が急速に進歩する現状にもあって、裁断を考えるにしても、「強靱なものである」との思い、「これに慣れてしまう」ことで、「複式簿記の神話」に無意識に頼っていることを自覚しておかねばならないのでは、ということである。

そこで、「複式簿記の神話」についてであるが、本来ならば、複式簿記が誕生する13、14世紀のイタリア簿記まで遡源しなければならないのかもしれない。しかし、ドイツ簿記の16世紀から取組んだだけの筆者には、これまた、軽率に対応しうるはずもない。しかし、「単式簿記」にしても、「複式簿記」にしても、本来、「簿記」(Buchführung od. Buchhaltung) (Book-keeping) は、「帳簿を備付ける(保持する)こと」、したがって、まずは、「帳簿に記録すること」を意味する。それでは、いつから記録するようになったのか、「何をどれくらい」、これをどのように記録するようになったのか、「何のために」記録するようになったのか、「記録すること自体」の起源は……。そして、帳簿に記録することを意味する「簿記」との関わり、特に「複式簿記」との関わりは……。 「記録の起源と複式簿記の記録」、このような課題は、筆者がドイツ簿記の16世紀に取組んで以来、筆者の脳裏によぎり続ける問題である。このような問題を解明することは、「複式簿記の神話」に無意識に頼っていることを自覚しうる

にちがいない。

## 2. 「記録」の起源

### 1) アルタミラの壁画と記録

まずは、唐突かもしれないが、「アレタミラの壁画」を想起してもらいたい。スペインの北海岸に面するサンタンデル (Santander) の近郊の西側に位置して、カンタブリア山脈の北斜面にあるアルタミラ (Altamira) に、先史時代、1万5千年以上も前の旧石器時代の人間が洞穴ないし洞窟に描写したという壁画である。これが発見される発端には、あまりにも有名なエピソードがある。発見されたのは19世紀の後半。著書『世界の洞窟壁画 石器時代からの声』(“VOICES FROM THE STONE AGE, A Search for Cave and Canyon Art”, London.) によると、「ひとりの男が犬を連れて小高い丘の屋根を歩いていた時、突然犬が狐を追って走り出し、雑木林の中に消えた。狩人が後を追って行くと、犬は大きな丸石の間にはさまれていた。犬を助けだすために大石を動かすと、大きな洞穴の入口が現れた。スペインのこの地方では、地下洞穴は至るところにあるので、その時は関心を寄せる人も全くいなかった」<sup>4)</sup>。その後、「在野の考古学者が、何か歴史的に興味のあるものが見つかるかもしれないと思って、洞穴の中を調べてみることにした。発掘していくうちに、動物の骨やすりへった火打ち石が出土した」<sup>4)</sup>。後になって、「彼は以前より力を入れて調査をし、ある時、5歳になる娘」を連れて行った。父親の発掘にあきて、「洞穴の場所をひとりで探検しようと、ぶらぶら歩いていた。突然彼女は叫んだ。『見て、パパ、ほら、牛の絵があるわ』、これが先史時代美術の発見の最初だった」<sup>4)</sup>のである。図1を参照。

4) 田口實訳；『世界の洞窟壁画 石器時代からの声』(Mazonowicz, Douglas; VOICES FROM THE STONE AGE, A Search for Cave and Canyon Art, London 1975.), 佑学社 1979年、46頁。

なお、訳書では、「12歳」と表現されるが、「5歳」の誤謬であるので、そのように訂正して表現する。



図 1

事実、「大天井の部屋」<sup>5)</sup>と呼ばれる広間の「低い天井には奇妙な隆起がたくさんあり、そのふくらんだり突き出たりしている自然な形の上に、太古の芸術家が数多くの野牛、馬、鹿、猪を描いている。そのふくらみの形が動物の輪郭線になっているので、それぞれが座っていたり、かがんだり、歩いていた、立ったりという、さまざまな自然の姿に描かれている。自然のふくらみによる立体的な効果には目をみはるものがある。天井の写真を逆に見ると、野原で動物達が休んでいるような感じがして、さらに印象的となる。25頭ほどの動物が、1.2メートルから1.8メートルまでさまざまな大きさで、横壁から上の方へひろがって描かれている」<sup>6)</sup>。

そこで、「天井を詳細に調べてみると、先史時代の画家は特別な形の岩の突出部を選んで磨き上げ、まず動物の輪郭と細部を彫り込む。次に体の部分に赤、

5) 大高保二郎・小川勝共訳；『アルタミラ』（Saura Ramos, Pedro A./ Múzquiz Pérez-Seoane, Matilde et.al./ Beltrán, Antinio; *ALTAMIRA*, Barcelona 1998.），岩波書店 2000年，21頁。

6) 田口實訳；前掲書，43頁以降。

なお、野牛、馬、鹿、猪は、旧石器時代のそれであるので、現在とは全く相違する植生。参照、大高保二郎・小川勝共訳；前掲書、20頁。

茶、黄土色などを塗り、最後に沈んだ黒い顔料——たぶんマンガンか炭で、輪郭を描いている。こういう動物画の中で、同一の構図をとっているのがいくつかあり、牝の野牛のほとんどが群れの真中にいて、尾を上げてかがんでいる（子供を生もうとしている?）。その間牝の野牛は外側に向いて立ち、群れを守っているように見える。ある場合は絵と彫刻が重なり合っていて、時代的に少なくとも4つのスタイルがまじり合い、最古の指で描いた線や不可解な記号から、写実的な動物画までが一緒くたになっていると思われる<sup>7)</sup>。

それでは、このように描写したのは「何のために」、となるのだが、著書『アルタミラ洞窟壁画』（“*ALTAMIRA*”, Barcelona.）によると、「制作動機はあまりにも複雑であり、洞窟とその絵画が厳密に何を意味するかは確信をもっては知りえない<sup>8)</sup>」とのことである。しかし、学界を支配したのは「呪術説<sup>7)</sup>」。この呪術説によれば、「狩猟、すなわち、獣を生け捕りにするためではなく、豊饒、つまり動物の種の繁栄を祈り絶滅の危機を避けるためにも、追い立てられ傷ついた獣の画像を介して呪術を行ったというのである<sup>9)</sup>」。

事実、この大天井の間に描写される野牛の1頭、1頭の写真、たとえば、「卵形のふくらみの上に描いている野牛<sup>4)</sup>」と呼ばれる写真、「振り返っている野牛、頭部だけ岩のふくらみに描いてある<sup>10)</sup>」と呼ばれる写真の1枚、1枚を眺めると、呪術的に描写したようにも想像しうる。図2を参照。



\*卵形のふくらみの上に描いてある野牛



\*振り返っている野牛。頭部だけ岩のふくらみに描いてある。

図2

7) 田口實訳；前掲書、45頁以降。

8) 大高保二郎・小川勝共訳；前掲書、13頁。

9) 大高保二郎・小川勝共訳；前掲書、11頁。

10) 田口實訳；前掲書、47頁。

しかし、前掲の著書の「あとがき」によると、「洞窟壁画の解釈としては『呪術説』が定説として信じられており、概説書などでは『呪術説』が事実のように扱われていることも少なくない。もちろん『呪術説』は洞窟壁画という造形現象を今なおもっともうまく説明する原理であり、そこに何がしかの真実が含まれているのも疑いのないところである。しかし、一線の研究者で現在『呪術説』を標榜している者はほとんどいないというのも、否定できない事実である」<sup>11)</sup>。

もちろん、「現在『呪術説』を標榜している者はほとんどいない」にしても、想像するに、絵画がそうであるように、人間の心の内を描写したことは間違いのないのではなかろうか。

しかし、簿記学者である筆者としては、この大天井の間に描写される野牛の1頭、1頭を眺めるのではなく、この野牛の頭数の「全部」が線刻される「アルタミラの大天井の多色画作品群の描き起こし」<sup>12)</sup>と呼ばれる壁画の全景を眺めていると、考古学者からの批判は覚悟して、あえて憶測するに、そのように心の内を描写したのは、むしろ、自身の記憶を確実なものにするために描写したのでは、と想像するのである。1万5千年以上も前の旧石器時代の人間ともなると、1個、2個、3個・・・とか、1頭、2頭、3頭・・・とか、「数えること」を知らない人間、まして、1, 2, 3・・・の「数」も知らない人間である。「数えることを知らない、数も知らない人間」は、原初的には、野牛を「これだけたくさん」狩猟したことを誇るために、改めて、野牛を「これだけたくさん」狩猟したいとの願いから、このように描写したのでは、と想像するのである。そのような自身の記憶を確実なものにするためにこそ、「数えることを知らない、数も知らない人間」は、野牛を1頭、1頭、頭数だけ写實的に描写したのでは、と想像するのである。図3を参照。

11) 大高保二郎・小川勝共訳；前掲書，181頁。

12) 大高保二郎・小川勝共訳；前掲書，12頁/13頁。

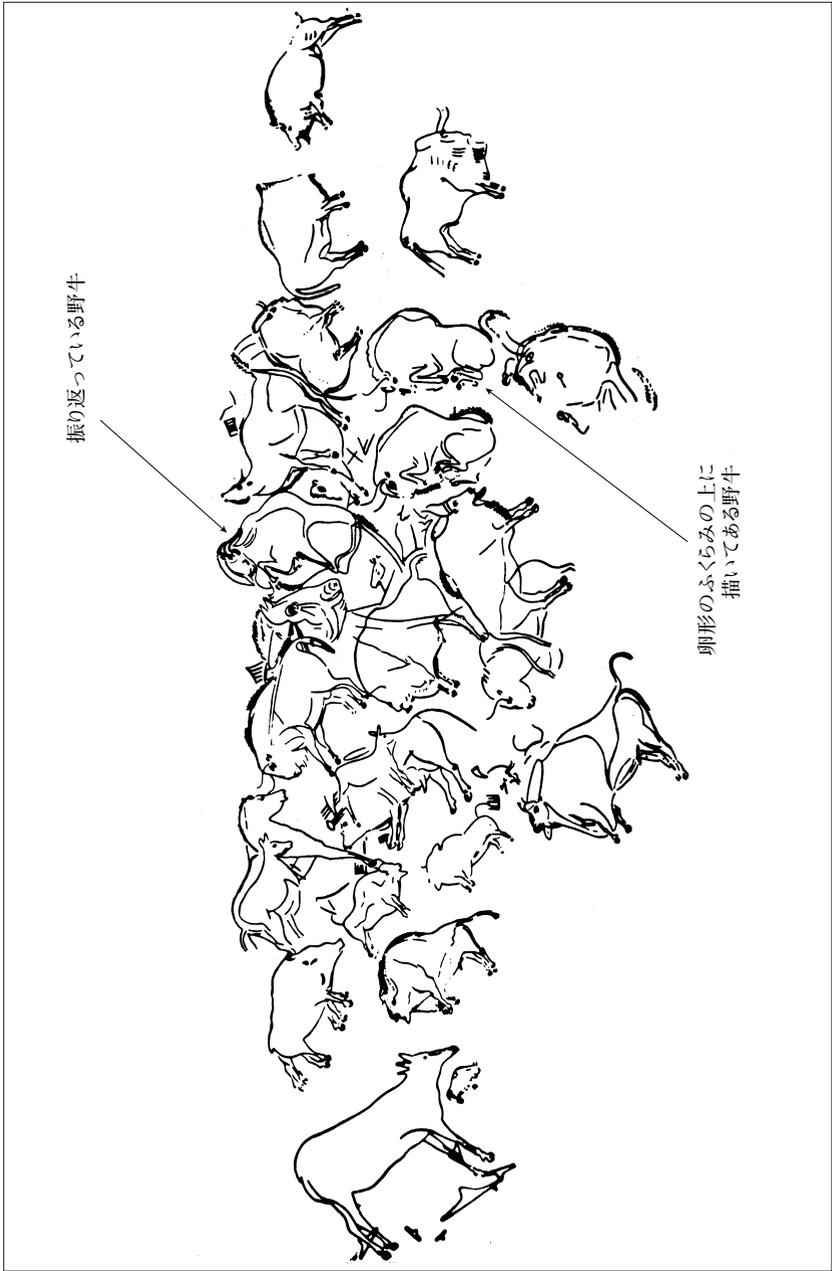


図 3

したがって、いつから記録するようになったのか、「何をどれくらい」、これをどのように記録するようになったのか、「何のために」記録するようになったのか、「記録すること自体」の起源は、となると、ここに起源があるなどとは断定しえないにしても、原初的には、野牛を1頭、1頭、頭数だけ写實的に描写することによって、野牛を「これだけたくさん」狩猟した旨、改めて、野牛を「これだけたくさん」狩猟したい旨、この旨の自身の記憶を確実なものにするために、このように記録するようになったのでは、と想像するのである。そのかぎりでは、「備忘」手段として記録しただけではなからうか。証憑、したがって、後日の「備忘証明」手段として記録するのではなさそうである。

そうであるとしたら、野牛を1頭、1頭、頭数だけ写實的に描写するのではなく、たとえば、野牛の頭部の図柄を1頭、1頭、頭数だけ抽象的に記録することも想像しうるはずである。「絵文字」が発明されるのである。たとえば、世界に最古の文字。メソポタミア時代の遺跡、ペルシア湾に面した地域、メソポタミア低地のシュメール (Schmer) の古代都市はウルク (Uruk) で発掘された粘土板に、前3200年から前3100年頃に使用されたという「シュメール文字」として、牝牛、牡牛の頭部の図柄が記録される<sup>13)</sup>。その後、メソポタミアに隣接する地域、イラン高原の西側、シュメールの東側に位置するエラム (Elam) の古代都市はスーサ (Susa) で発掘された粘土板には、前3000年頃に使用されたという「原エラム文字」として、種馬、牝馬、仔馬の頭部の図柄が記録される<sup>14)</sup>。したがって、頭部の図柄の絵文字を頭数だけ記録することも想像しうるはずである。

しかし、このような粘土板には、頭部の図柄を1頭、1頭、頭数だけ抽象的に記録するのではない。著書『数字の歴史 人類は数をどのようにかぞえてきたか』(“*HISTOIRE UNIVERSELLE DES Chiffres*”, Paris.) によると、「粘土板

13) Cf., Ifrah, Georges; *HISTOIRE UNIVERSELLE DES Chiffres*, Paris 1981, p.160.

参照、松原秀一・彌永昌吉監訳；『数字の歴史 人類は数をどのようにかぞえてきたか』、平凡社 1988年、122頁。

「シュメール文字」については、後述。

14) Cf., Ifrah, Georges; *op. cit.*, p.163.

参照、松原秀一・彌永昌吉監訳；前掲書、123頁。

「原エラム文字」については、後述。

(*tablette d'argile*) の表面に、場合によっては、この裏面にも、時として、いくつかの刻み込まれたくぼみ目の印と多様な紋章、特定の用具（円筒印章）を柔らかい粘土に押し付けた紋章であるのだが、このようなものが付されている。シュメール文字 (*écriture sumérienne*) と原エラム文字 (*proto-élamite*) の文書に、以後、多く現われる、このくぼみ目は、数の印と解釈されるようになった。有史以来、最古の『数字』なのである。この数字の傍らには、何かの切っ先で彫り込まれて、図式にしたような1つか複数の図柄が付されている。そこには、ありとあらゆるものが図柄にされているが、それぞれの文字の記号（絵文字）なのである。いくつかの粘土板には、数字と絵文字に併存して、象徴的な絵柄が浮き彫りにされるが、これは円筒印章。円筒印章を粘土板の表面に横に転がして浮かび出る刻印である」<sup>15)</sup>。

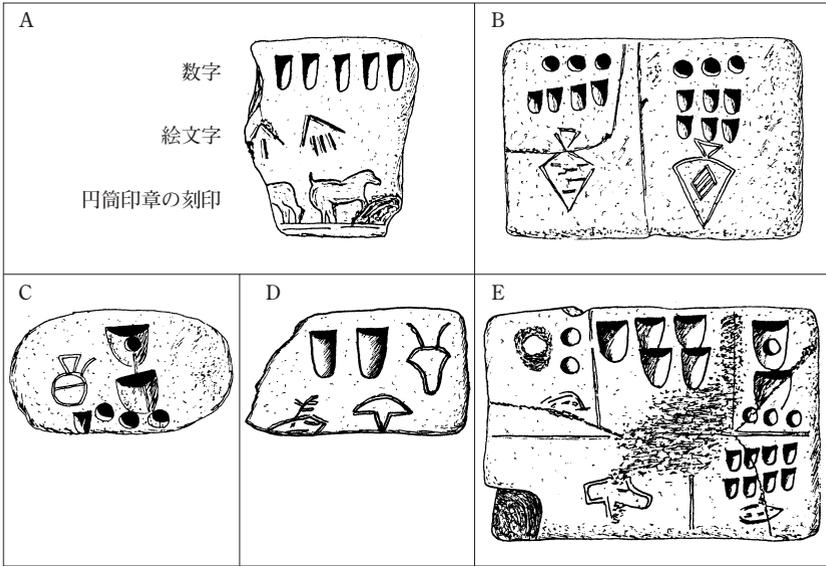
事実、前掲の著書によると、「シュメール文字の最古の文書は、ウルクで、正確には『ウルク遺跡第4a層』と呼ばれる考古学層で発掘された。この文書は『標準型』として作成されて、古来から『粘土板』と呼ばれる小さな粘土製の乾燥板である。これに対して、『原エラム文字』の最古の文書は、これも同様に粘土板であるのだが、イラン領のいくつかの地域で発掘された。特にスーサでは、『スーサ遺跡第16層』と呼ばれる考古学層で発掘されている」<sup>16)</sup>。図4および図5を参照。

15) Ifrah, Georges; *op. cit.*, pp.163-164. 括弧内は筆者。

参照, 松原秀一・彌永昌吉監訳; 前掲書, 124頁。

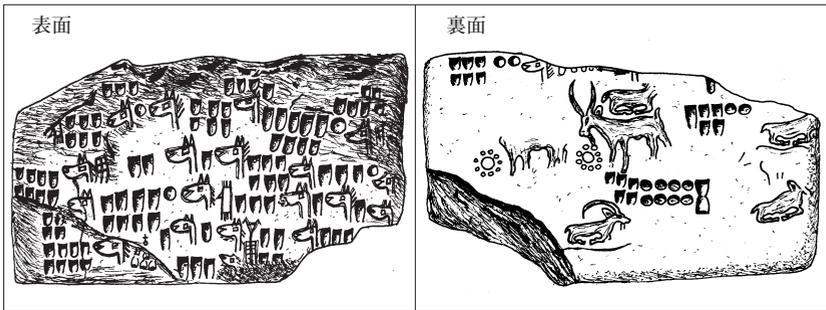
16) Ifrah, Georges; *op. cit.*, p.162.

参照, 松原秀一・彌永昌吉監訳; 前掲書, 123頁以降。



\*ウルクで発掘された粘土板。粘土板A, B, CおよびEの絵文字は判読されえないが、粘土板Dの右下の図柄は牝牛の絵文字。右端の図柄は、頭部に角の付かないのが牝牛と判読されるので、牡牛の絵文字と想像。頭数は、大きさも形状も相違するくぼみ目の数字をまとめて記録。

図 4



\*スーサで発掘された粘土板。粘土板の表面には、たてがみを逆立てた種馬、たてがみを垂れた牝馬、たてがみのない仔馬の絵文字で分類。頭数は、大きさも形状も相違するくぼみ目の数字をまとめて記録。裏面には、頭数のくぼみ目の数字と円筒印章の刻印。

図 5

したがって、もはや「数えることを知らない、数も知らない人間」が記録するのではない。すでに、「数字」が発明されるのである。メソポタミア時代には、「数えることを知った、数も知った人間」が記録するようになる。牝牛、牡牛の頭部の図柄、種馬、牝馬、仔馬の頭部の図柄を絵文字で記録して、頭数は「刻み込まれたくぼみ目の印」の数字で記録する。「何をどれくらい」、これをどのように記録するようになったのか、となると、絵文字と数字の、まさに「文字を知った人間」が記録するようになるのである。

そうであるとしたら、「数えることを知った、数も知った人間」が記録するようになるまでに、まずは、「数は知らないが、少しでも数えることを知った人間」が記録するようになったのでは、と想像するのである。野牛を1頭、1頭、頭数だけ写実的に描写するだけでも、野牛の頭部の図柄を1頭、1頭、頭数だけ抽象的に記録するだけでも、たとえば、牝牛、牡牛の頭部の図柄、種馬、牝馬、仔馬の頭部の図柄を絵文字で記録するだけでも、野牛の頭数の「全部」、牝牛、牡牛の頭数の「全部」、種馬、牝馬、仔馬の頭数の「全部」は記録しうるはずである。1、2、3・・・の「数」は知らないまでも、1個、1個、1個・・・とか、1頭、1頭、1頭・・・とか、「少しでも数えること」を知った人間は、結果的に、頭数の「全部」、したがって、「これだけたくさん」狩猟した旨、「これだけたくさん」飼育している旨を確認しえたのでは、これを記録することで、その旨の自身の記憶を確実なものにしえたのでは、と想像するのである。そのかぎりでは、これまた、「備忘」手段として記録しただけではなからうか。証憑、したがって、後日の「備忘証明」手段として記録するのではなさそうである。

もちろん、頭数の「全部」を確認するだけであるのなら、野牛を1頭、1頭、頭数だけ写実的に描写するまでもない。野牛の頭部の図柄を1頭、1頭、頭数だけ抽象的に記録するまでもない。したがって、頭部の図柄を絵文字で頭数だけ記録するまでもない。

たとえば、「数は知らないが、少しでも数えることを知った人間」は、想像するに、「1組の紐、刻み目を付ける骨があるとしたら、それだけではなく、小

石であったり、細い棒であったりもするのだが、これによって、彼は少しでも数えられるようになる」<sup>17)</sup>のではなからうか。ヨリ原初的には、1組の紐であれば、結び目を付けることによって<sup>18)</sup>、骨であれば、刻み目を付けることによって、小石であったり、細い棒であれば、積むとか並べるとかによって<sup>18)</sup>、結果的に、野牛の頭数の「全部」、牝牛、牡牛の頭数の「全部」、種馬、牝馬、仔馬の頭数の「全部」、したがって、「これだけたくさん」狩猟した旨、「これだけたくさん」飼育している旨は確認しうるはずである。

もちろん、骨に刻み目を付けるのは、粘土板に彫り込むのと同様であるので、記録することにはなるかもしれないが、これ以外は、そうではない。しかし、記録することはないにしても、その旨の自身の記憶を確実なものにするためには、記録することと同様に、結び目を付けた1組の紐、積んだとか並べたとかの小石または細い棒は保持しておかねばならないはずである。「帳簿」では決してないにしても、まさに備付けておかねばならないはずである。

事実、前掲の著書によると、「55本の刻み目の付いた狼の橈骨（前腕の拇指の側にある軸状の長骨）が発見された」<sup>19)</sup>。20世紀の前半に「チェコスロヴァキア（現チェコ）はヴェストニス（Horní Věstonice）で発見されたのである。これは2万年以上も昔のもので、最古の『計算器具』の1つである。この骨の棒を使用した祖先は、恐るべき狩人であったのである。動物の1頭、1頭を殺すたびに、狩人は骨に刻み目を付けた。そして、この骨は、動物の種類によって、熊の骨、野牛の骨、また狼の骨というように、相違していたにちがいない。実際には、このように最も単純ではあるが、数の言語として数字の刻み目を付け

17) Ifrah, Georges; *op. cit.*, p.16.

参照、松原秀一・彌永昌吉監訳；前掲書，14頁以降。

18) たとえば、結び目を付けた1組の紐は、「結繩」、インカの言葉で「結び目」を意味する「キボス」(quipos)としてインカ時代に、積んだとか並べたとかの小石または細い棒は、ラテン語で「小石」を意味する「カルクルス」(calculus)、複数形は「カルクリ」(calculi)としてメソポタミア時代に使用される。

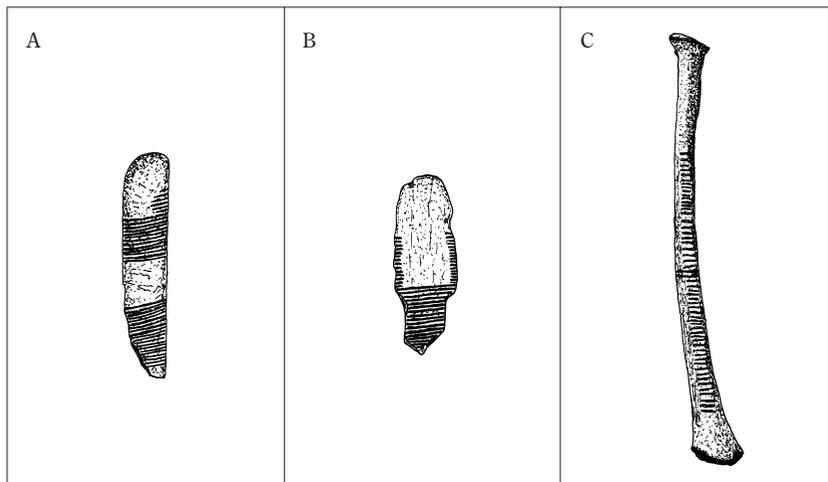
「カルクリ」については、後述。

なお、骨に刻み目を付ける習慣は「ローマ数字」に反映されるとのことである。

Cf., Ifrah, Georges; *op. cit.*, pp.101-104./p.165./p.5.

参照、松原秀一・彌永昌吉監訳；前掲書，77頁以降/135頁/3頁。

たのだから、彼は数えることの第一歩を発明したことになる」<sup>19)</sup>。図6<sup>20)</sup>を参照。



\*現チェコで発見されたことでは同様であるが、チェコの南東に位置するヴェストニスではなく、チェコの東に位置するモラヴィア (Moravie) 地方のクルナ (Kulna) の洞穴で発見された刻み目を付けた骨はAおよびB、同地方のペカルナ (Pekarna) の洞穴で発見された刻み目を付けた骨はC。

図 6

そこで、自身の記憶を確実なものにするためには、記録することと同様に、刻み目を付けた骨は保持しておかねばならないことである。想像するに、前掲の著書によると、『「数えることを知らない、数も知らない人間」(quelqu'un qui ne sait guère compter ni concevoir de nombre) の手元に、動物または物品を数える代わりに、たとえば、1組の紐、刻み目を付ける骨があるとしたら、それだけではなく、小石であったり、細い棒であったりもするのだが、これによって、彼は少しでも数えられるようになるのか。

19) Ifrah, Georges; op. cit., pp.4-5. 括弧内は筆者。

参照、松原秀一・彌永昌吉監訳；前掲書，2頁以降。

20) Cf., Ifrah, Georges; op. cit., p.92.

参照、松原秀一・彌永昌吉監訳；前掲書，68頁。

これでは、確かに効率は悪い。場合によっては、ヨリ複雑なことも多い。しかし、たとえば、放牧に連れて行った羊が戻って来たときに、同数の頭数があるかどうかを確認するためには、頼りにはなるのである。これには、数えるという術を考えるほど知性的である必要など全くない。『数えること』を知らない羊飼いが、毎晩、羊の群れを洞穴に収容していると想定しよう。羊の頭数は55であるのだが、彼には、『55という数』が何であるかは理解できない。彼が知っているのは、『たくさん』の羊を飼っていることだけである。これでは的確でないで、彼は、毎晩、すべての羊が戻って来たかどうかを確認したいと考える。そこで、彼は、ある日のこと、あることを思い付く。洞穴の前に座って、羊を1頭、1頭、収容していくのである。彼の前を羊の1頭、1頭が通過するごとに、用意しておいた狼の橈骨に刻み目を付ける。そうすることで、彼は算術的な意味など気付かずに、最後の羊が通過したときに、55本の刻み目を付けてしまっている。それからは、毎晩、羊を洞穴に収容するたびに、骨の端から端まで刻み目を1本、1本、指でたどりながら、指が最後の刻み目に達すると、羊飼いは安堵するのである。これで自分の羊を洞穴に収容したことになるからである」<sup>17)</sup>。

したがって、記録することと同様に、刻み目を付けた骨を保持しておくことで、自身の記憶は確実なものにしうるはずである。しかし、これでは、結果的に、頭数の「全部」、したがって、「これだけたくさん」狩猟した旨、「これだけたくさん」飼育している旨を確認しうるだけで、それが「何であるのか」、野牛であるのか、牝牛、牡牛であるのか、種馬、牝馬、仔馬のいずれであるのか、羊であるのか、となると、動物の種類によって刻み目を付した骨が相違していたにしても、この「少しでも数えることを知った人間」自身の記憶に頼りしかないのである。

そこで、いつから記録するようになったのか、「何をどれくらい」、これをどのように記録するようになったのか、「何のために」記録するようになったのか、「記録すること自体」の起源についてである。「数えることを知らない、数も知らない人間」が、まずは、「数は知らないが、少しでも数えることを知った人間」として、ヨリ原初的には、1組の紐であれば、結び目を付けることに

よって、骨であれば、刻み目を付けることによって、小石であったり、細い棒であれば、積むとか並べるとかによって、頭数の「全部」を確認したところに、その起源があるものと推断しうるかもしれない。しかし、刻み目を付けた骨、これ以外は、記録することはないのである。そのかぎりでは、「数えること自体」の起源でしかないのかもしれない。しかし、記録することと同様に、刻み目を付けた骨はもちろん、結び目を付けた1組の紐、積んだとか並べたとかの小石または細い棒は保持しておかねばならないということでは、「記録すること自体」が開始されたものとは推断しうるのではなからうか。

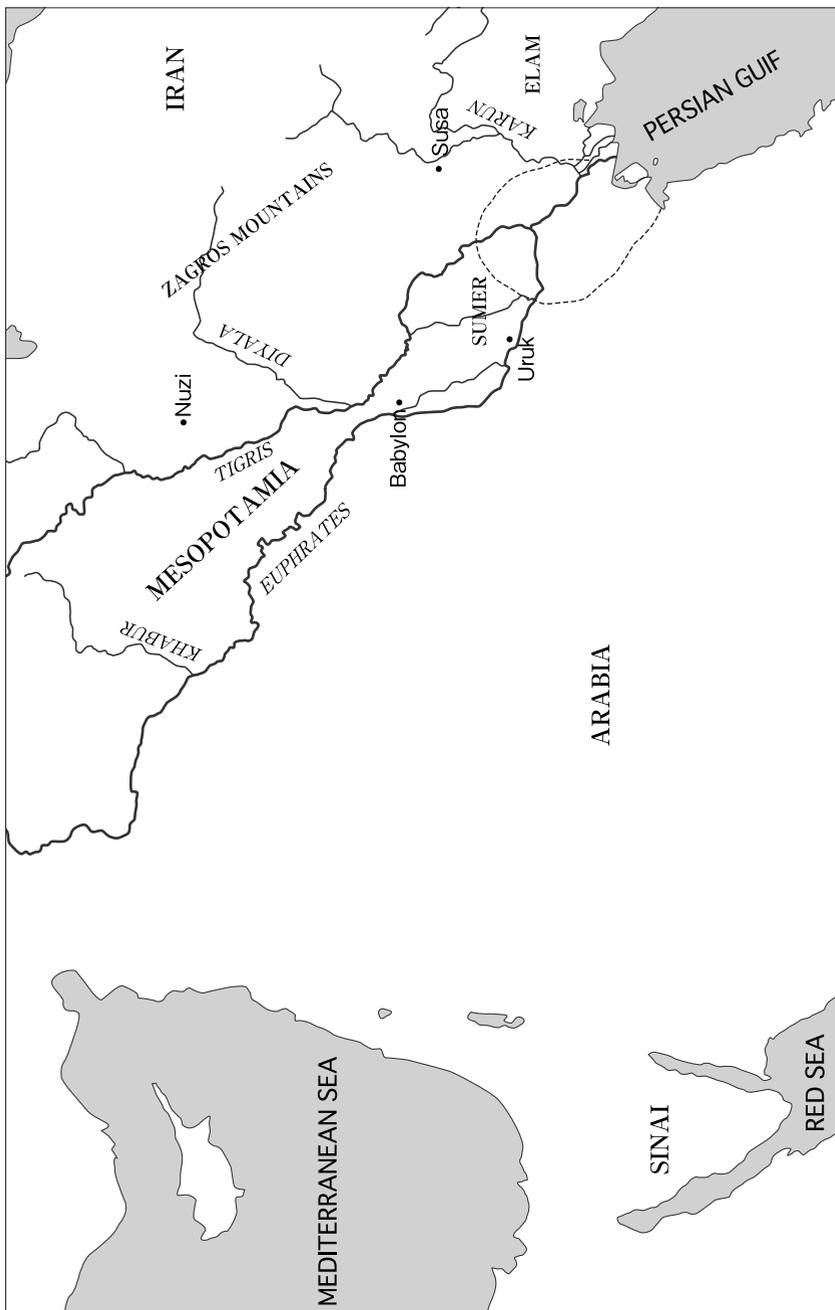
もちろん、これでは、結果的に、頭数の「全部」、したがって、「これだけたくさん」狩猟した旨、「これだけたくさん」飼育している旨を確認しうるにしても、それが「何であるのか」については、その「少しでも数えることを知った人間」自身の記憶に頼るしかないのである。したがって、それが「何であるのか」を確認するには、「数えることを知らない、数も知らない人間」が、原初的に、そうしたように、野牛を1頭、1頭、頭数だけ写實的に描写するしかない。野牛の頭部の図柄を1頭、1頭、頭数だけ抽象的に記録するしかない。たとえば、野牛であるのか、牝牛、牡牛であるのか、種馬、牝馬、仔馬のいずれであるのか、羊であるのか、頭部の図柄を絵文字で頭数だけ記録するしかないのである。しかし、これでも、結果的に、頭数の「全部」、したがって、「これだけたくさん」狩猟した旨、「これだけたくさん」飼育している旨を確認しうるだけである。「少しでも数えることは知ったが、数を知らない人間」が記録することには、自ずから限界がある。

そこで、「何をどれだけ」、これをどのように記録したのか、したがって、「何を」全部の個数は「何個」とか、「何を」全部の頭数は「何頭」とか、具体的に正確に記録するとなると、「数えることを知った、数も知った人間」が記録しなければならないはずである。そうであるからこそ、「記録すること自体」の起源は、メソポタミア時代に、頭部の図柄を絵文字で記録して、頭数は「刻み込まれたくぼみ目の印」の数字で記録する、絵文字と数字の、まさに「文字を知った人間」が記録するようになるまで待たねばならないのではなからうか。

もちろん、「何のために」記録するようになったのかとなると、自身の記憶

を確実にするために記録するようになっただけで、証憑、したがって、後日の「備忘証明」手段として記録するのではなさそうである。あくまで「備忘」手段として記録しただけではなかろうか。

なお、これからの理解を容易にするために、「ティグリスとユーフラテスの姉妹河川に挟まれた国」と呼ばれたメソポタミアの「シュメール」と、メソポタミアに隣接する「エラム」を描写する地図を付け加えておくことにする。



\* 点線の部分は古代の海岸線。